Book Review

農村地域の活性化について

関西学院大学法学部 教授　小川 大和

「地域」とは、とても多義的な言葉だと思います。一般的には、「区切られた土地／土地の区域」（広辞苑）という意味になるようです。英語で表現しようとすると、「region」「locality」「district」「community」「neighborhood」など文脈に応じて単語が異なりますが、日本では、それらをまとめて「地域」と表現しています。そう考えると、基準をどこに置くかで「地域」の規模感は変わってくるように思います。「世界」（world）を基準に置くと、アジア、ヨーロッパ、アフリカ等が「地域」になるかと思います（この場合、英語では「region」）。「地域研究」とは、一般的にこの「地域」を意味するようです。「日本」（nation）を基準に置くと、地方ブロック（東北など）を「地域」（region）とする場合もありますし、三大都市圏に対する「非三大都市圏」や地方中核都市に対する「農村」を「地域」とする場合もあります（この場合、英語では「locality」。市町村単位ともほぼイコールだと思います）。それより小さい単位として、小学校区、集落単位などの「地域」もあります。英語では「district」「community」「neighborhood」などでしょうか。

また前置きが長くなってしまったのですが、「地域活性化」や「地方創生」と言ったときに、その「地域」や「地方」のレイヤーは多層的になります。その中でも、日本においては、「農村」という「地域」が数的にも、エリアの広さ的にも大きなインパクトを持つように思います（したがって、その活性化はとても重要であることに異論はないと思います）。

「農村」というと、自治体の農林部局の皆さまからは、どうしても農学の視点からアプローチをしたくなると思いますが、それにとどまらず、より広い「地域」という視点からアプローチをすることも大切だと思います。その観点から、参考にしていただけるのは、『新しい地域をつくる―持続的農村発展論』（小田切徳美／編、岩波書店、2,970円）です。本書では、農村・農業経営学や農業土木学に加え、経済学、行政学、環境学、地理学、地域社会学、地域計画学など、多様な専門領域をバックグラウンドとする研究者の方々が各章を執筆し、「農村」を総合的に分析しています。2022年の発刊なので、ポストコロナや近年の農村をめぐる変化、データや政策状況のアップデートを踏まえた上で、理論・実践の両面から、農村をめぐる現状を客観的・体系的に示し、実態・課題を明らかにしています。農村の活性化をより広い視点から担いたい、と考えられている政策担当者の皆さまにとってとても参考になる本かと思います。

『新しい地域をつくる―持続的農村発展論』小田切徳美／編　岩波書店

逆に、地域振興部局の皆さまからは、地域という視点からアプローチをすることだけでなく、異なる「農学」という視点からアプローチをすることも大切だと思います。その観点から、参考にしていただけるのは、『地域固有性の発現による農業・農村の創造』（中塚雅也／編著、筑波書房、2,750円）です。「地域特性」を活かして地域の活性化を図ることが重要であることは言うまでもありません。本書の「地域固有性」は、「地域特性」と似たような概念だと理解していますが、その一つ一つは、「農村集落の固有性」として農学、植物学、生態学などの視点（自然科学的視点）などから導出されており、行政学における「地域特性」という頭で読み進めると、とても新鮮な驚きと発見があります。例えば、「DNAからみた植物の地域固有性」「土壌の地域固有性と人との関わり」「住み継がれる集落空間と地域固有性」などです。地域を普段とは異なる視点から見ることで、未発見の「地域特性」を見出せることもあるかと思います。その異なる視点を提供してくれる本であり、同様に、政策担当者の皆さまにとってとても参考になる本かと思います。

『地域固有性の発現による農業・農村の創造』中塚雅也／編著　筑波書房